

神の言葉

真の心に誠あるなら 心しずめて思案してみい

この業を なんの事やと思うかな 己の姿よう見えてある

天の心 地の心 二つ一つが 天の理なるぞ

なぜ見えぬ わしのせきこみ何と思う 人間思案入れるでないぞ

この町は 火の海なるぞ あ町は火水風でないと思えよ

どのような 人間思案も おもわくも わしの眼には 可愛いばかりや

因縁寄せて守護した わしのおもわく 何と思うぞ

しかと聞け 三六二五のくれあいに 胸の掃除を始めかけるで

火が見える 水が狂うておる姿 誰が眼にも未だ見えんか

この事を 何の事やと思ひおる 人間ほこり 積んでおるゆえ

残るもの 残らん者は四分六や 月日飛び出しさびわけ掃除や

さあ思案 天と地とがひっくり返る 近いで 近いで

来んものに 無理に来いとは云はんでな 日が来たらんで見ゆるしている

今の世に 笑うて歩くその姿 近い日にわ わしの引き取り

引きとりも ちよつとの事ではないからに 地獄の責めや 火水風や

これ分かりたら思案せえ 人間思案さらに入れんで 欲と高慢まゝにならんぞ

何時もわしは 見分けて見抜いておる 真実ならば しかと受け取る

真実を 一寸の事やと思うなよ 言うと思うと行なうが 三つ一つの事を言うのや

嘘についしうは まゝならん よろづの世は もう許せん

此の世始めた親なれば ちよつとの事は 見許していた

しかと聞け まづ仏にて教えかけ ついでキリスト 更にみき

わしの思惑 未だ分からんか

だめの教えと しるするも 刻限近いゆえの事から

上やとて 下やとて思うなよ 皆一列にさびわけ掃除や

山が泣く 海が泣く日が いづれ来る 泣き声聞こえば しかと走れよ

心の掃除 しかとする 頭で云うではない まづは心のほこり払いや

しかと聞け わしから掃除の口火は切らん お前達が戦い 後はわしぢや

この事を 何と想着て聞いておる 一二は終え 後は三やぞ

この日とは 九にて九がなくなりて 十にておさまりがつくのやぞ

さあ思案 全て己の業と思ひ しかとこえや

さあさあしかと得心せ 人が何ごと言おうも わしが見ている 氣をしづめ

天はわし 地は因縁 天地一体 最後の業や

なんぼの業やと 言うたれど 生は天や 引き取りは地やぞ 歩けや歩けや

人間思案 入れるでないぞ たすける心に 我が身たすかる

人間は あざないものであるからに 人間思案ばかりやで

ちばの 西門さきの一室に 面足の命現わして 人間子供に皆とき聞かす

面足と言うのはな 此の世始めた 母親なるぞ

人間として 化身の世 あざない子供に 道をしるすため

面足の魂 須藤花井と言ふ者のからだに宿しこみ 人間最後の業も終え

今の呼び名 天照皇面足の命と 称しておる

もう日が来ておるで わしの用木 地場に集め 面足にて話し聞かそう

なんぼ上やと言ふたれど 元の親には かないあるまい

神がある者にはある、無い者には無いと、その者の心通りの守護をする。働きをかける。先祖に、仏に、神に入り込んで貰って助けを取りたいと、その誠実の心遣いを日々を見澄まして、先祖が、仏が、神が入りこんで働きをかける。

これからは、親も入らん、先祖も、仏も、神も入らん者に働きをかけん。助けをとらん。心通りの守護をする。このことわりを云うておく。承知をして貰う。

わしは、社の中にとじこもって働きはできん。助けはとってはおらん。わしは木の仏像でも、石の仏像でも、金の仏像でもない。

めどう（目標）として置かしてある。社の蔭から、仏像の蔭から話しかけておる。助けを取ってきた。やおよろづも皆この通り、決して取り間違いのないように、この際この事を話しておきたい。何か事ある場合は、社や、目どうや、仏像をかついで逃げる必要はない。この事を申しておく。

その時、その場の助けをさす為、いろいろの者を下げて来たが、皆わしの子供である。わしはこの神様、私はあの神様と、説く者によってあゝでもこうでもあると長いあいだ苦勞をしてくれたが、この日本は、日の国、日の本、根の国、底の国。

この根の国が、根が枯れると地球は使えない事になる。この根の国が世界を治める事になる。字も、ひらがなの字が世界の字になる。世界中の人々が日本に寄って来る。宗教も一つにまとめる事にする。

これ知らず あざない人間思案にて 辛い業をさせるのも

すべて わしの験しなるぞや

さあ言おう 天は火の雨 海は津波や 刻限近いそれ故に 助け急げや
どんな者として助けたい わしとてみきとて同じ心や じゃがもう間に合わん 助か
るものから助けえや

神一条になりて来い 人助けではない 我が身たすけや

今の道 何の道やと思うかな みきも通りたくらい細道

この道越えたる所に見えておる 光の姿 しかと見ゆるぞ

何時もわしの思惑思案せよ 何ぼの者にも感謝や感謝や

思案せよ この草原もあの山も 月日飛び出し 泥海にする

この泥海 何の事やと思うかな 人間始めた 元の姿や

何も無い 無い無いずくしは有難や 有れば有るほど ほこり積もるで

欲と色とは一の残念 二と三とは 思案 高慢

この思案 何の事やと思うておる 人間思案とぞ言うておくぞや

何もかも 皆々わしの子供ゆえ 一列は皆 兄弟なるぞ

しかと聞け 五月に見えかけ 六七にては苦にありて 八九十にて治りがつく

この日柄 何の事やと思うかな わしの立腹 たしか見するぞ

わしが幾度言おうとも 分からん者は山とおる 捨ておけ捨ておけもう間に合わん
なんぼ立派や言うたとして わしの眼には まだまだ子供や

さあ思案 神一条の道とはな 心の改心はげむ事やぞ

人が何事言おうとも 全てわしの証拠ためしや 全てわしの急ぎ込みや
人が見れば乱心者でも わしはしかと見ておるで

わしは元の神 全知全能なる真の神 キリストやとてみきやとて みなみなわしの
子供や わしの名は 親神と称しておこう

稔の耳にて言い聞かせ 神々の心つないだわしは くにさづちの命と称しておく
宗教分裂さらにいかんで 後世には 一つにしよう 思案々々 行け々々。

(以上昭和四十九年一月十七日午後二時三十分啓示)

真実の話

この話し 誰の話しと思うかな 此の世造りた神の話しを

何事も 真実よりで 思案せよ もう近々に律も変わるぞ

何者も わしのおもわく思案せよ 今日の日とは万日となり

この世に 不思議と言うは数あれど 人間思案で解けるものなら

わしが出て 話し聞かせる事はなし 人間造りた元の話しを

わしが此の度現われて 話しするのも何のためやら

この事は 数千年以前より 見定めつけておいた事やが

誰とても 知らぬ話しは山とある 人間思案で解けぬ事から

この下界 地球と申せしこの場所は 人間思案で見苦しいなり

ほこりとて 一寸の事ではないことを みな人間は気付いておるのに

何者も わしの思惑分くらいで 病になれば医者くすりを

何事にも親たるの わしの思惑気付かん事にて

病もな 治ると言うは更になし 心通りに出しておるゆえ

熱い火傷と言うのはな 我が身が熱い のぼせ心や

のぼせとは どう言う心と思うかな これ短氣とぞ言うておくぞや

身体は わしのかしものや わしの思いで息の根までも

それ故に 病と言うは更になし 全ておのれの心通りや

その事も 今日の日ではみな忘れ 地場にも建てた 煎いの家やら

この建物も わしの思ひにかなわん故から 掃除の日には見事つづする

これまでは 医者は立派と言うたれど もうこれからは文句変わるぞ

心から 直せん病と言うものは さらに無いとぞ言うておくぞや

涙もな 出そうと思うて出せるなら 出してみい この池までも

夢事も みなわしの思惑あるゆえに 軽く思うはさらになきよに

何事にも此の世は わしの思惑 思ひのまゝ故

アフリカに 雨が降らぬも思案せい 春が早いも思案するなら

今日の日も 一寸の思いで越せぬはづ 人間思案はやく断ち切れ

この冬に 雨を多く降らせたも みな面足の願ひ事から

この願ひ どう言う事に思うかな これ親心とぞ言うておくぞや

この冬に 雪を降らさぬことにては 春が何時やら 冬がいつやら

何者も 親の心が分くらいで まゝにするのも もう一寸やで

今の世に 笑うて歩く畜生を ほっておくのも親心から

この親心 何の事やと思うかな 近い日まで 一寸の事ゆえ
その日には 何処に何があるのやら わしの他には誰も分ならず
おのれの心をそのまゝに しかと見分ける もようするので

今日の日は 良きも悪しきも好きにせい 近い日にはしかと返すぞ
何事にても人間は 我が身思案が あるゆえからに

親の試しも分からいで 信じるの 信じられぬのと色々と 言っているのも
今のうちやぞ

信じることの難儀さや 信じることの有難さとは

人間造る苗代に 使つた神のいざなみが 百数年以前にて 大和の地場で説いた筈
中山みきと言う名を借りて

この事が 悟りついたらさあ歩け 病がなおる 心入れ替え

今の天理の教えとは そのまゝわしの思いとは さらに云わんぞ思案してくれ

みきが天に昇りし後 わしが話した飯降伊蔵

その後を 継いだるナライトは 中山家の者達の 人間思案で出家させられたゆえ
今の教えは中山教 大事な事は言うておらん

しかと聞け 誠のことを 今、初めて 人間子供に説き聞かす

みきが記した ふでさきは 地と天の二冊あるなり

今人間が読むものは 地の巻なりと しかと言いおく

地の巻の ふでさきに書き記した事柄は 掃除の事や 後世の事や
信じられぬ者が居るならば 真柱にも 問うてみい

問うたとて 一寸の事ではないからに 再三問えと言つておくぞや
それやとて 天理の教えは最後なるの わしの教えと説いておるゆえ

3
甘露台は嘘ではない 今の世に わしの思いを伝える者が 天理の中に居ると
こそしれ

その者達も わしの思惑あるゆえに 数々の処から引出したゆえ
信じるならば附いてこい つきくるならば しかと分かるで

さあ言おう みなみな思案 しかとしてくれ

この世に 面足の命現わして 苦に苦を重ね 磨き上げたで
みきの道が表なら 花井の道は 裏の道なる

今の世は 大なる屋敷や家なるが 立派と言えば信じると言う おかしな事なり

花井のな 屋敷と言うは万の世や この天や 姿と言うは日なり 大蛇なり

それやとて 今の屋敷は一室や 姿と言うは 貧しいおばあ

花井にも 一人の子供おるゆえに 鉄之助とぞ言うておくぞや

この事は キリストにての聖書の中に しかと云いおく みな思案せよ

もう日が来ておるで 面足を表に出すもよう しかとするので

それ見たら 思案せい 我が身の事は いらん事や

何事にても 何者も わしが見事に掃除するので

今の世に 立派と云うはさらになし 下と云うはさらにないぞや

これからは 陽気づくめの世の中を わしがじきじき造ること知れ

これからは 上や下やの隔てない みな一列の陽気づくめや

この話し 夢のように思うなら これ後世とぞしかと云いおく

この世になりたら わしの思惑も みな一列に知っておるゆえ

早々と 今の世を掃除して いらん者は みな払うなり

この世になりたなら 人間一列は 朝は夜明けと共に起き

己が喰うものなるは　みな己より作ることなる

それ済みて　陽が真上をさすならば　何をするも　みな好きにする

この世になりたら出直しも　みなが思いのまゝになるぞや

いたい者は　いつまでもいよ　古着はいらぬものは　さあ脱ぎすてよ

あっちの家も　こっちの家も　酒を飲んでも　さらに苦はなし

誰が嫌うも　好きもない　みな一列はきょうだいたるゆえ

この世に　ほこり心を積む者は　すぐその場にて　わしが引き取る

この世にて　わしが引き取りと云うのはな　これ抹消とぞ云うて置くぞや

それやとて　もうこの世は神代ゆえ　子数の子しか残らん事なる

さあさあ人間一列思案して　後世に残るもようしてくれ

雨の日を望むなら　雨も降らそう　皆が良いほどに

晴の日を望むなら　冬でも春の日のように

誰が上や下もない　みな一れつに　生きることなり

地には花が咲きみだれ　果実も山とあるゆえ

地にも　高台を造るなら　大和にいても　見ゆる見ゆる

そのはずや　今の山と云うのもな　上や窪みのな一列に

見事平地に　したてゝ見せるで　何処へ行くにも　さあさあ近いこと

何も不自由なきように　陽気づくめの世にするぞや

今日は通夜と云う家も　みな寄りおうて　笑い話を

酒を飲み　歌を唄うて舞いおうて　出直す者に　ねがうこと

今度はわしの息子にぞ　いやいやわたしの息子にぞ

さあさあこれ程の陽気の世　夢ではないぞ　みな残ってくれやぞ

神の言葉

わしもしっかり種を蒔こうと、わしは、みきにも、よろづにも手伝って貰うて、良い種と悪い種の選別をする。

お前達が、原爆、水爆、ミサイル、殺人光線と、人殺しの道具を一生懸命造って人の命を絶つのも、わしが水を入れ、風を吹かせ、火水風を使い、地震を起して善悪を分けるのもあまり違いは無い筈の事。

原爆、水爆、ミサイル、殺人光線を使って火の玉のぶちあいをやると、地球は鍋の底のような穴があいて吹きだす。大きな地震で、南極、北極の氷が溶けて世界の陸地三分の一、世界の人口四分六、この地球も宇宙もみんなわしのもの。

火には水、この地球を冷やさん事には地球はもたん。神代の昔から、今日此の日の来る事は分かっておった。その為南極、北極に氷を貯えて用意をしておいてある。お前達人間を造ったのも、元はと云えばわしがつくった。わしはお前達の親じや。

お前達の身体を造ったのも、元はと云えばわしがつくった。身体も心も貸してある。このことわけは、大和の天理の中山みきを神として表に出して人間を造った元の話しを云わしてある。

何もかも、全ての物資を調べて、楽しく陽気に暮らして行けるようにとの思いから、雨を降らせ、風を吹かせ、色とりどりの花を咲かせ、花の匂いを送り、眼を楽しませ、うまい実がなったら喰えるようにとの親の思いが、蔭からの働きはどれだけぞ。

あれこれと一れつ兄弟が楽しく陽気に暮らして行けるようにと、車に乗ってもその通り。そこいらにある物を、どしんと音を立て、落として、今日は車がこんな風に落ちるぞと、前もって知らせを出してやっても何の悟りもない。残念な！

わしが、みきが、よろづが、どれだけ働けば分かって貰えようぞ。この親の蔭からのいとなみも分からずにお前達兄弟は、欲の喧嘩ばかりをやり、取り合いをして原爆、水爆の戦争をする。わしはこれだけは許す事は出来ぬ。！今度は許さんぞ。

今迄は、どんな事をして黙って見て来たが、許すことは出来んぞ。

お前達の住む世界は、この地球以外には無いはずのこと。この親のわしの云う事を聞かん時には地球はわしの云う通り。世界の陸地は、今の三分の一になり、世界の人口四分六。何処から何処まで陸地が減るか、何処の国の人口がなんぼになるか、納得の行くまで聞かしてやる。よく聞いておいて貰おう。

いついつ迄もこの事は、話しの種になる程に。地球の続く限り、宇宙の続く限り、いついつ迄も戒めておく。

世界の子供は皆わしの子供、可愛いばかりに云うて聞かしてやっておる。お前達はみな一列兄弟や。今度戦争をやったら地球はどうなるか、地球を造ったわしには良く分かつておる。一列兄弟の話しをしても分からん様な、分からず屋の阿呆の事も。自分さえ良かったら、人はどうでもよい様な、真実誠の分からん様な者も。

なんぼ云うて聞かしても、喧嘩ばかりしている様な者も。なんぼ人間は頭が良くても、人を殺す道具を造る道具人も。

自国の為のスパイも、他国の為のスパイも、宗教を神の名をもってスパイ活動した者も。やらせる者も、権力の座に坐り、人をしいたげる者も。

人をけしかけておいて、人に意地悪をさせて、自分は蔭で手をたゝいて喜ぶ様な腹黒も。真面目に働かずに、腕力、暴力をはたらく暴力団も。

俺の身体は俺のものと、身体を粗末に扱う者も。火、水、食物、その他全ての資源を粗末に使う者も。

なんぼ天理教の者でも、わしの仕事を邪魔するものがあれば、その人間は、なんぼ良くても一度生命を引き取って、陽氣ぐらしの世界に早く生まれ直すようにする。先祖が徳を積んでおってもその限りではない。このことわりを云うておく。助けるに助けられん。元の子数は陽氣ぐらし。世界まで魂は抱きかゝえて早く生まれ直さず。

わしもしつかり種をまこ。わしも、みきにも、よろづにも、手伝って貰うて、良い種、悪い種の選別をする。

他の星は もう神代となったゆえ 人間思案はさらにないぞや
それゆえに よろづの神も現われて 話しするのも 親心から
この世を 始めたわしの言う事に 千に一つも違うことなし
誰とても わしの言う事聞かんなら そのまゝ見せる本道の教え
それ故に 人間苦しむその事も 全てわしの手引きなるぞや
その事を みなめいめいに思案して 本道に出るもようしてくれ
なに事も わしらの教えと思うなら 苦も喜びに変わるはずやぞ
その事を みなめいめいの胸の内 しかと入れておく もようするなら
今日の日も よろずの事も思案して 一寸の油断もさらにないはず
此れほどの わしの話しを聞き入れて 思案するなら 分らんことなし
今日の日は 脇目ふる間もない程に 急がしいやら 苦しいやら

今日の日に 上たる心で笑う者 近い日には わしの立腹
何事も わしが此の世に現われて 見事掃除をしたてゝ見せる
それまでは みなめいめいの胸の内 澄まするもよう しかとしてくれ
この事を 一寸の事やと思うなよ 近々見える日があるので
わしが最後に現われて 説いた話しを 最後の教えを
意味ありありと 言いしるす 親の思いが未だ分らんか
みきやとて キリストやとて神界にて 子供の事を案じておるゆえ
わしが出て みなじきじきに話し聞かする 思案してくれ
なに事にても わしの思惑分かりたら 全て解けると 言うておくぞや
誰とても わしの子供であるゆえに 親が手を引く 迷う事なし
この事を 何の事やと思うかな 人間ほこり積んでおるゆえ

さあさあ示しておこう。神に仕えるお前達の心しかと聞き分け思案してみい。

神が求める成人の心、円やぞ、丸やぞ、和やぞ、これ即ち無につながる。己を切り、邪心を払い、人間のためよろづの為一心になり切る心、これ即ち真実やぞ。

わしが云う真実、しかと分かるか。口では云えん、考える事もできん。じゃが目に出る、身体にでる。これ真実として、わしは受け取る。助けたいから云うのではない。助けたいならお前達が行え。真実の助け、これお前達の改心をおいて他にない。たすけたすけと云うではない。助けて貰う感謝を持てや。わしの云うこと、しかと得心いくか、いやいやまだまだ分からん筈や。

何故ならば云うておこう。高い山から水は流れ、低いところへ来るものや。高い山へは水は流れん。高慢、これはかなわん。聞く耳持てぬ者ばかりのよろづの世、わしもみきもみな残念や。じゃから今こうして筆に記して云うておく。

真実とは無やぞ、愛とは、真実の愛とは己を切り捨てたる事や、全て捧げつくすことや。これ分からずして何が云える。いや、分かったとて、行なわずして人が分かる筈がない。無とは円や、和やぞ、豪ではない。わしは真実しかと受け取る。何も

云わずとも分かる日は来る。これ言おうとする。己の真実になりきれた時や、更に云おう。分からん者も山とおる。じゃがもう日が足らん。助かる者からお助けや。なんぼ分からん者として助けたい。その気持は、みきとて、わしとて同じ事や。じゃがもう日が足りん。先ずは神一条になりきれ。さらに、人を助けて我が身助かる。助けさせて頂く感謝の心しかと忘れるでないぞ。素直、それ即ち落ち着きや、間違うでない。掃除々と云うておるが、先ずはお前達の心からや。心得違ひはまゝにならん。今のよろづの世、律も怖いやろう。じゃが、わしと律と、どちらを選ぶ。好きにせい、もう日が足りん。しかとたのむぞ。

親 神 (昭和四十九年一月十五日 午後二時三十分 啓示)